

2022年11月発行

大学の就職・キャリア支援活動に関する調査

コロナ禍3年目で進行してきた2023年卒者の就職戦線。企業の採用意欲に回復傾向が見られるなど、コロナ禍による混乱は落ち着いてきたように映る。一方で、就活準備が追い付かず取り残される学生の存在もあり、大学には個々の学生に応じたきめ細やかな支援が求められている。こうした中、就職支援の現場ではどのような課題をもち、対策に取り組んでいるのだろうか。

ディスコでは、全国の大学の就職課・キャリアセンターを対象に、2023年卒者の就職活動状況、2024年卒者への就職支援、インターンシップ等への意見など、多岐にわたる項目を調査し分析した。

【主な調査内容】

1. 2023年卒者の就職活動状況	P 2
[1] 内定状況	[4] 学生からの相談
[2] 求人状況の変化	[5] 2023年卒者の就職支援の課題
[3] 新卒採用市場の見方	
2. 2024年卒者への就職支援	P 6
[1] 就職ガイダンスの実施状況	[5] 業界研究・企業研究セミナーの実施状況
[2] 就職ガイダンスの実施形式	[6] 企業からのアプローチ
[3] 就職ガイダンスの実施テーマ	[7] 学生の就職意識に対する所見
[4] 就職ガイダンスの参加状況	
3. インターンシップ等^(※)のプログラム	P 10
[1] インターンシップ等の求人状況	[3] インターンシップ等に対する見解
[2] 学生の参加状況	
4. 低学年向けキャリア支援	P 12
[1] 実施状況	[2] 実施内容

※「インターンシップ（就業体験を伴う複数日程のプログラム）」に限定せず、1日以内のプログラム等も含めて尋ねた

《調査概要》

調査対象：全国の大学の就職・キャリア支援担当部署
 調査方法：インターネット調査法
 調査期間：2022年9月1日～9月24日
 回答学校数：448校

*「大学3年生」は6年制の5年生と修士1年生を含みます。
 「大学4年生」は6年制の6年生と修士2年生を含みます。

国公立	私立	合計
103校	345校	448校

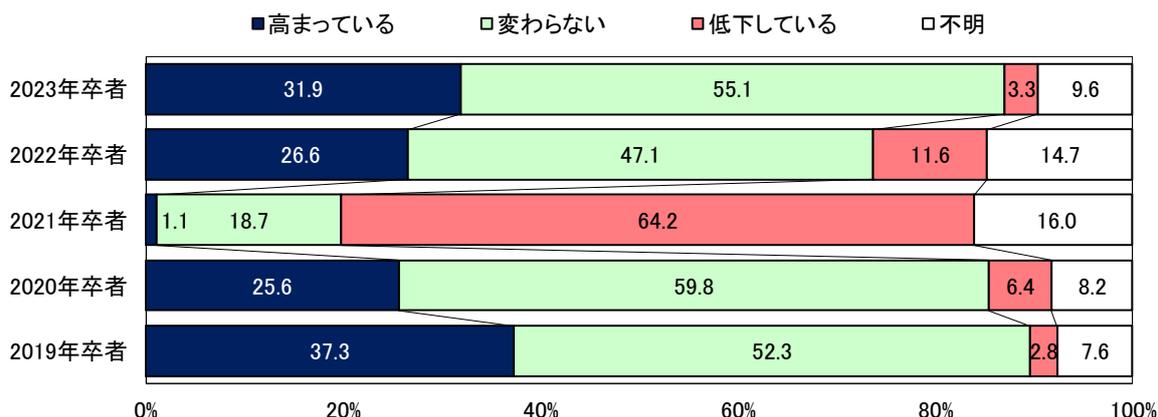
北海道・東北	関東	中部	関西	中国・四国	九州・沖縄	合計
51校	153校	84校	86校	37校	37校	448校

1. 2023年卒者の就職活動状況

[1] 内定状況

まず、2023年卒者（現4年生）の内定状況について確認したい。前年度と比べて「高まっている」と回答した大学は3割を超え（31.9%）、「低下している」（3.3%）を大幅に上回る。2年前の2021卒者ではコロナ禍の影響で「低下している」が6割を占めたが（64.2%）、その後は企業の採用意欲回復に伴い、内定状況の改善を実感している大学も増えてきているようだ。

＜内定状況（前年度と比べて）＞

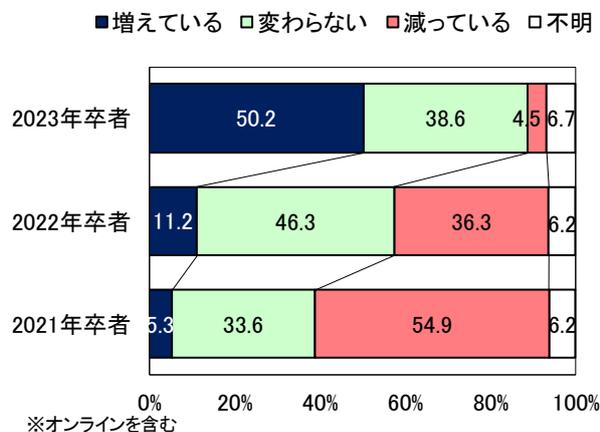


[2] 求人状況の変化

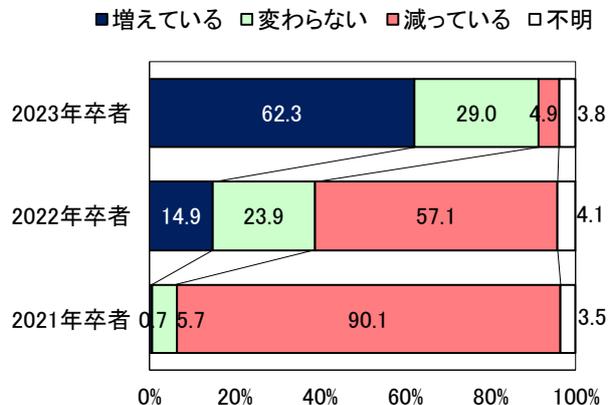
2023年卒者の求人状況に関し、前年度からの変化を尋ねた。求人数は「増えている」が過半数を占め（50.2%）、「減っている」はわずか（4.5%）。前年同期調査では「減っている」が3割を超えていたが（36.3%）、この1年で状況が大きく変化したことが表れている。

企業の来訪数は、前年度より「増えている」が6割超（62.3%）で、「減っている」（4.9%）を大幅に上回る。コロナ禍においては、大都市圏を中心に大学への入構制限などもあり、オンラインを含めても訪問数が減っており、前年調査では「減っている」が6割近かった（57.1%）。今年は、行動制限が緩和されたことも影響し、大学を訪問する企業が急増したことが読み取れる。

＜求人数の変化＞



＜企業の来訪数の変化＞

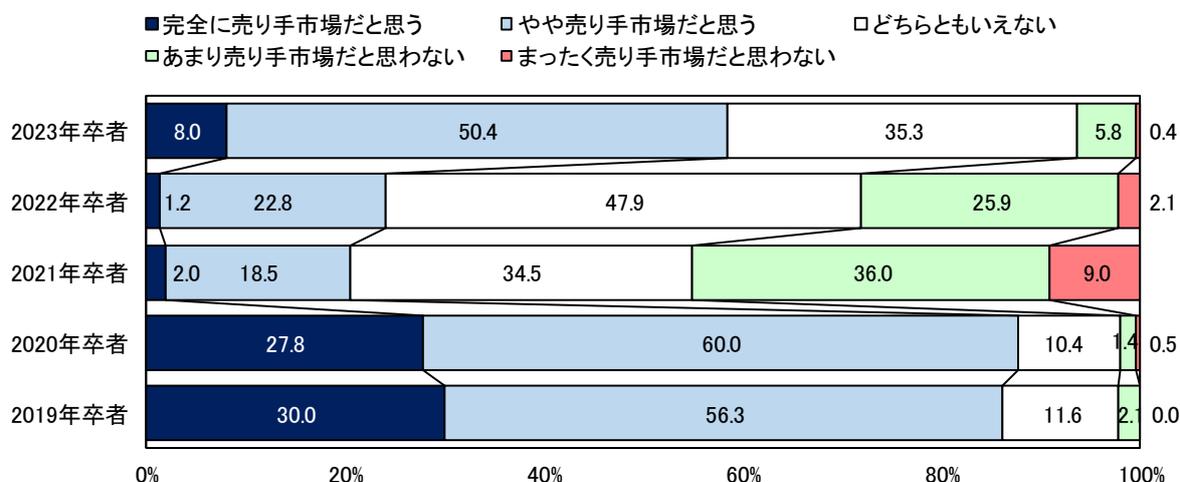


【3】新卒採用市場の見方

就職・キャリア支援担当者として、今年の新卒採用市場をどのように見ているかを尋ねた。学生に優位な「売り手市場」との見方が約6割（計58.4%）に対し、「売り手市場だと思わない」は計6.2%。寄せられたコメントからは、求人数の増加や内定率の上昇などから、売り手市場を実感する大学が増えていることがうかがえる。

ただ、コロナ禍前は「完全に売り手市場」が3割に上っていたが、今年は1割未満（8.0%）にとどまる。学生の専攻分野や志望業界によってもバラツキがあり、一概に売り手市場と言えないという意見も多く見られた。

＜新卒採用市場についての考え＞



■新卒採用市場についての考え

- 例年になく来訪企業が増えている。 <国立大学>
- 採用活動を停止していた業界からの内定も出ており、昨年や一昨年と比べて状況はかなり好転しているように感じる。 <私立大学>
- 内定状況が昨年同時期に比べ改善している。複数内定を獲得する学生の割合が増加した。大手企業への就職者数が増加傾向である。 <公立大学>
- 大学への求人数が多く、就活準備があまり整っていない状態でも内定を複数もらっている学生が増えた。 <私立大学>
- 特に中小企業から、学生を求める声が高まっている。 <国立大学>
- 例年この時期には採用活動を終了している中堅以上の企業から、採用延長等の相談も多く受けている。 <私立大学>
- 昨年に比べてかなりの求人数増加がみられる。ただし、学生の希望業界・業種・職種とは必ずしもマッチしているとはいえない。 <私立大学>
- 求人数だけ見れば売り手市場だが、学生の質にこだわっている企業が多いため、単純に売り手市場とは判断できない。 <国立大学>
- 主体的に活動する学生にとっては売り手市場だが、それ以外の学生は蚊帳の外である。 <私立大学>

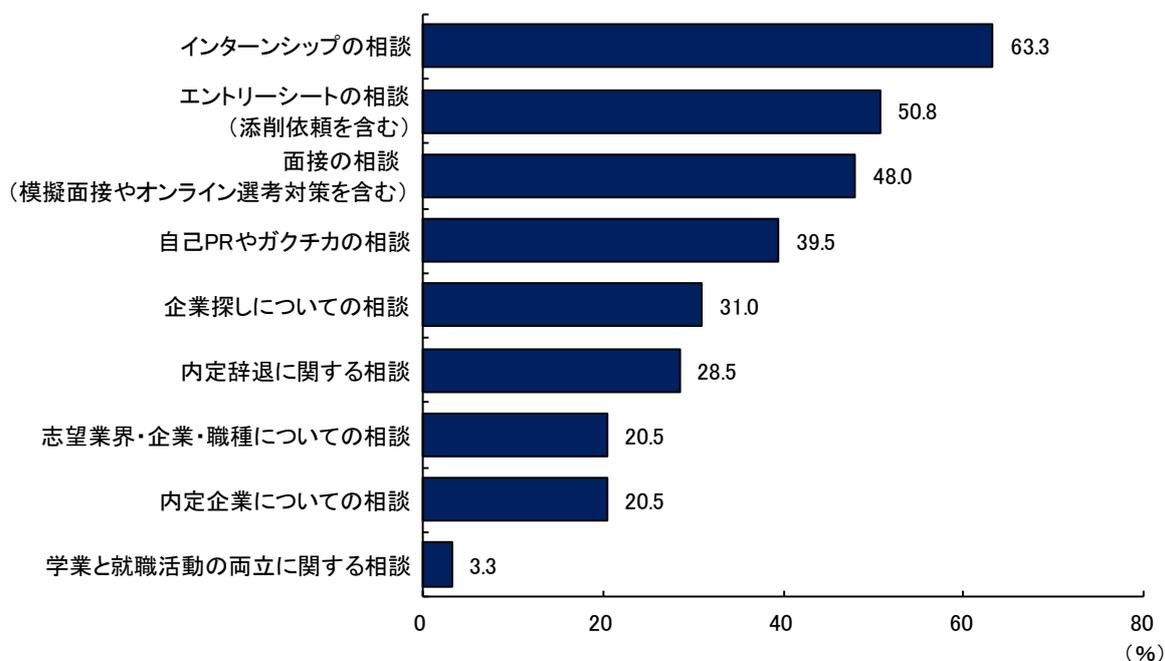
【4】学生からの相談

学生からの相談について、前年度より増えたものを尋ねた。最も多いのは「インターンシップの相談」（63.3%）。実施企業が増えたことや、学生の参加意欲が高まったことなどにより、相談も増加したようだ。

次に多いのは「エントリーシートの相談」（50.8%）。コロナ禍での大学生活が長期化したことで、内容に困る学生も多く、相談が増加したと見られる。「自己PRやガクチカの相談」が増えたという回答は約4割（39.5%）に上った。

3番目に多い「面接の相談」は半数近くが選んだ（48.0%）。最終面接を対面で実施する企業が増加したことで、オンライン・対面両方の対策を迫られる学生が多かったためだろう。また、「内定辞退に関する相談」は3割近くが増えたと回答（28.5%）。複数社から内定を得る学生が増加したことが、このデータからもうかがえる。

＜学生からの相談で前年度より増えた内容＞



■学生からの相談内容の特徴や変化

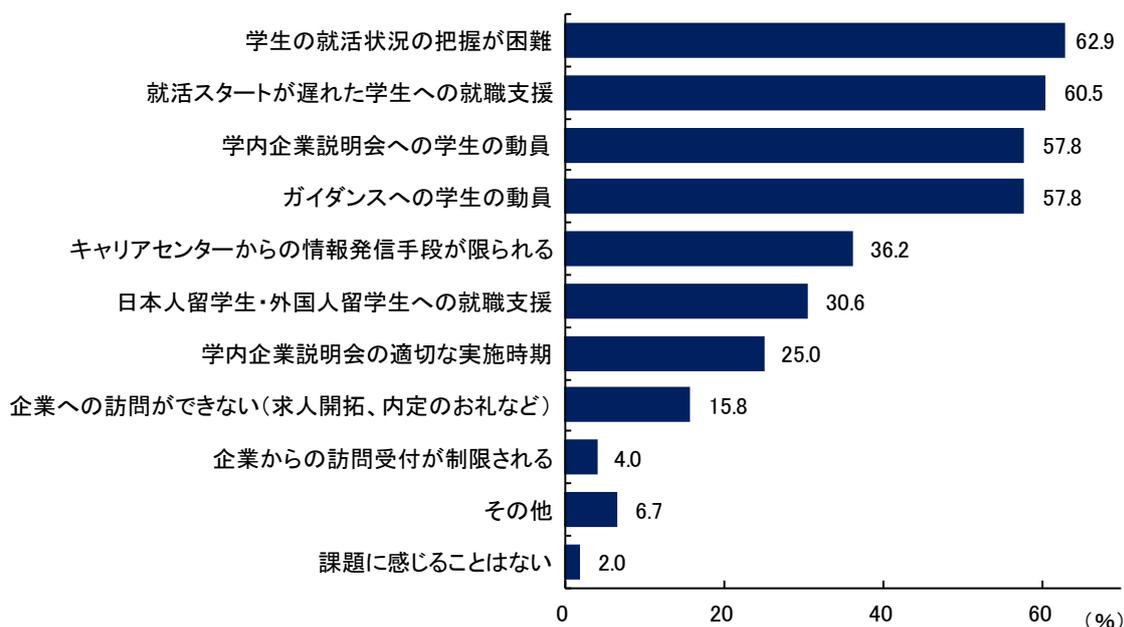
- インターンシップへの参加が増え、インターンシップに関する相談が増えた。 <公立大学>
- インターンシップに参加する必要性を感じる学生が増加しているが、インターンシップ先の探し方や選考等に苦戦している学生が増加傾向にある。 <私立大学>
- 特に多かった相談は、自己PR、ガクチカについてです。大学祭などのイベント減少や遠隔授業などにより、人と接する機会が激減し、書ける経験がなく、困っている学生が多く見受けられました。 <私立大学>
- 面接の相談が多かった。1次2次がオンラインで、最終面接が対面での面接になるので両方に対応するために相談回数が増えた。 <私立大学>
- 就活の早期化に伴い、複数内定を得る学生からの、内定承諾・辞退についての相談が増えた。 <私立大学>

【5】2023年卒者の就職支援の課題

2023年卒者の就職支援をする上で、課題に感じていることを尋ねた。「学生の就活状況の把握が困難」が6割超で最多（62.9%）。コロナ禍の影響を大きく受けた前年に引き続き、学生と直接対面する機会が得られず、就職活動の進捗を把握しきれないケースが多いことがうかがえる。

続く「就活スタートが遅れた学生への就職支援」（60.5%）、「学内企業説明会への学生の動員」「ガイダンスへの学生の動員」（ともに57.8%）は6割前後が選んでおり、学生との接点に課題を感じる大学が多いことがわかる。

＜2023卒者の就職支援の課題＞



■課題に感じていること

- 就活状況がまったくわからず、個別の問い合わせメール等にも返信してこない学生が、今年は特に多い。＜公立大学＞
- メールを見ない学生が多いため、ガイダンス等の学生への周知方法が課題となっている。＜国立大学＞
- LINEなどのSNSを活用するなど、より有効な情報発信手段を検討、実施していく必要を感じる。＜私立大学＞
- 年々、セミナーやガイダンスの参加者数が減少しているため、実施時期や内容等を再考する必要がある。＜国立大学＞
- 学内企業説明会への動員に苦戦しています。また、併せて、各種行事への動員数も減少傾向にあることが課題です。＜私立大学＞
- 例年に比べ全体の内定率は高いものの、外国人留学生の内定率が伸び悩んでいる。日本での就職を希望する留学生全般、特に日本語が不得手である留学生に対する支援やフォローにおいて課題を感じている。＜国立大学＞
- 学生の二極化が進み、早くから就職に対する意識を持ち、活動を行うことができる学生と、スタートが遅れている学生の差が大きくなってきたと感じる。＜私立大学＞

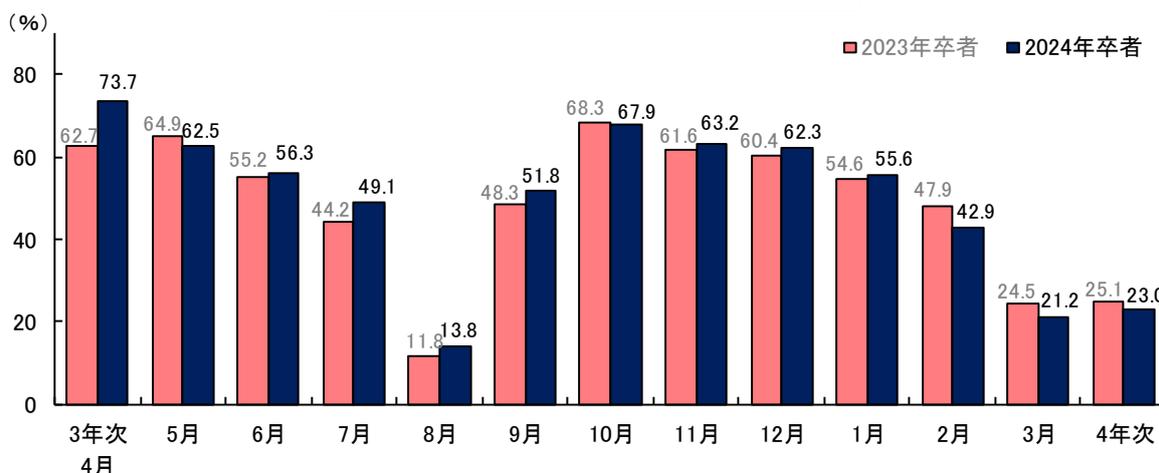
2. 2024年卒者への就職支援

【1】就職ガイダンスの実施状況

ここからは、2024年卒者（現3年生）への就職支援についてのデータを紹介したい。

まず、就職ガイダンスの実施時期に関して尋ねた（オンラインを含む）。3年次4月が最も多く、7割を超える大学が選んだ（73.3%）。前年より10ポイント以上増加し、新年度に合わせて実施するケースが増えた。なお、6月以降も多くの月で前年を上回っており、ガイダンスの実施時期、回数を増やした大学が多かったと見られる。

＜就職ガイダンスの実施時期(予定を含む)＞

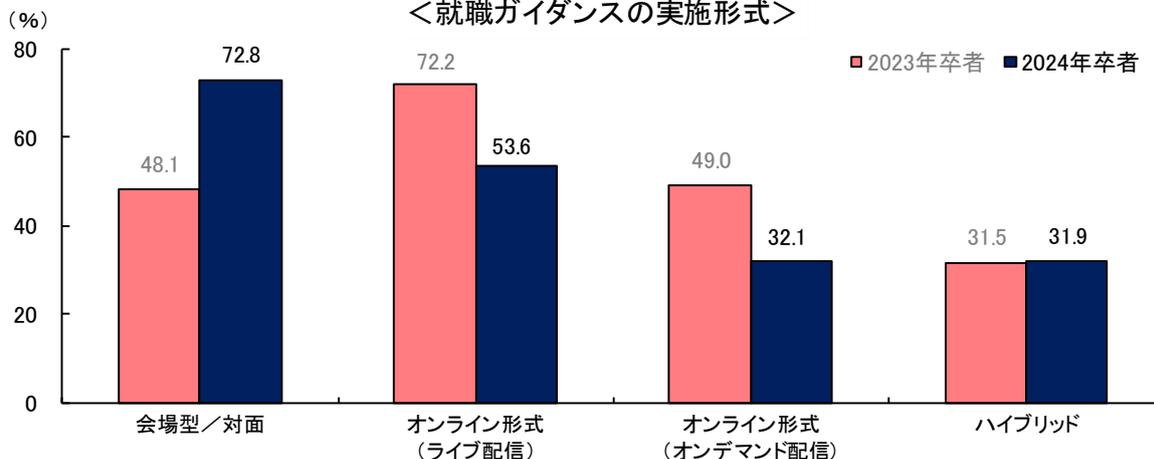


※オンラインを含む

【2】就職ガイダンスの実施形式

就職ガイダンスの実施状況を形式別に尋ね、前年同期調査と比較した。今年は「会場型／対面」が最も多く、7割超（72.8%）。前年より20ポイント以上増加した。一方、「オンライン形式（ライブ配信）」は53.6%で、前年（72.2%）より減少した。対面の授業が増加したことで、ガイダンスの形式も対面へと切り替えた大学が多いのだろう。「オンライン形式（オンデマンド配信）」「ハイブリッド」はいずれも約3割で、学生のニーズに合わせ、様々な形式で実施していることが読み取れる。

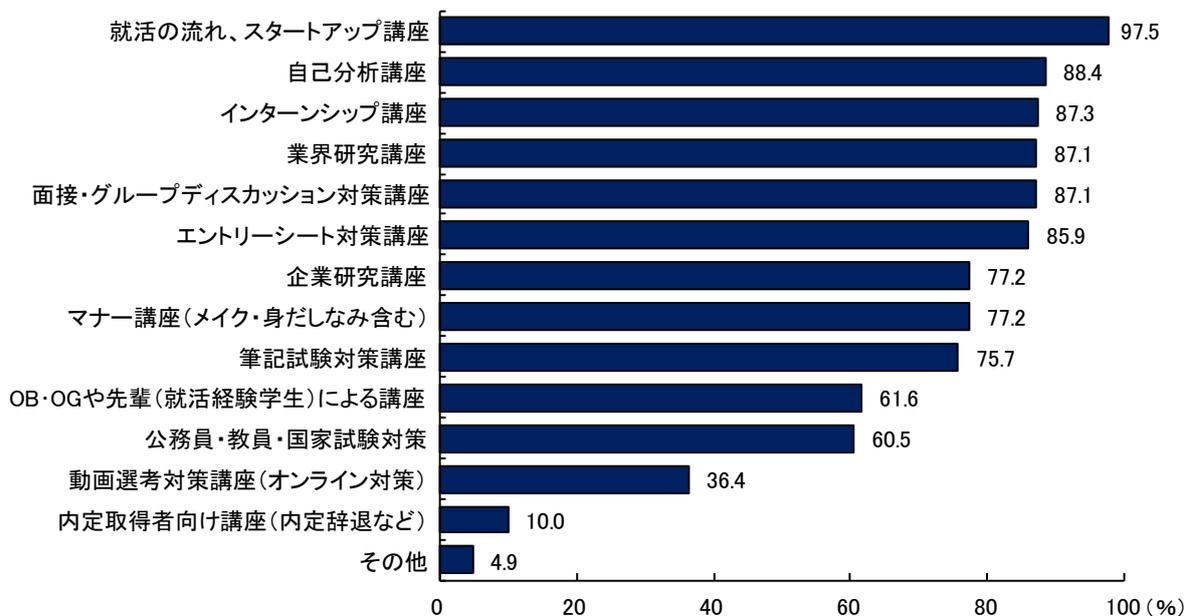
＜就職ガイダンスの実施形式＞



[3] 就職ガイダンスの実施テーマ

2024年卒者を対象としたガイダンスのテーマを見ると、「就活の流れ、スタートアップ講座」が97.5%で、ほとんどの大学が実施している。続く「自己分析講座」から「エントリーシート対策講座」まで8割台後半が続き、幅広い内容で実施している大学が多いことがわかる。

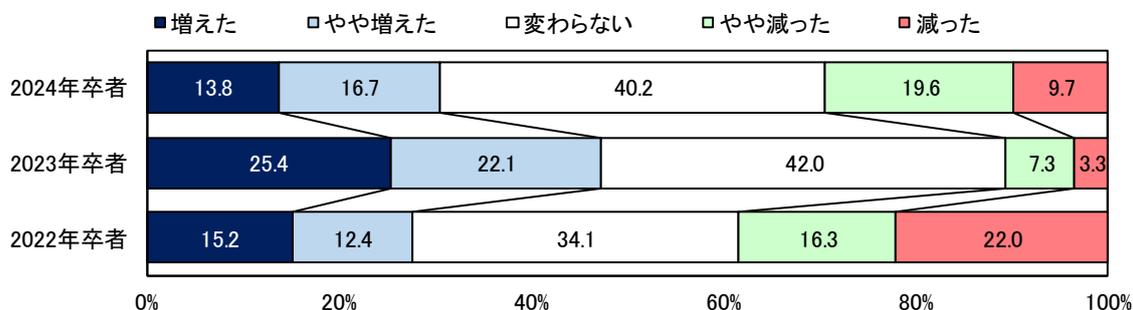
＜就職ガイダンスのテーマ＞



[4] 就職ガイダンスの参加状況

学生の参加状況について、前年度からの変化を尋ねた。「増えた」「やや増えた」を合わせると約3割(計30.5%)で、「減った」「やや減った」の合計(計29.3%)と拮抗。インターンシップへの関心の高まりなどから参加率の改善がみられる大学がある一方、授業との兼ね合いや実施形式の変更などにより参加率が低下した大学もあるようだ。

＜就職ガイダンスの参加状況＞



■ガイダンス参加者増減の理由・要因

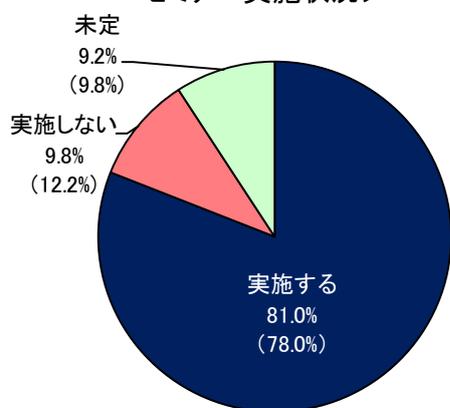
- 夏のインターンシップに向けてガイダンスに参加する学生が増えた。 <私立大学>
- 今年度から全授業が対面に戻ったことにより、参加人数が増加したと思われる。 <私立大学>
- 昨年は授業もオンラインだったが、今年は授業がほぼ対面実施となったため、オンライン形式に参加しにくかったと考えられる。 <私立大学>

[5] 業界研究・企業研究セミナーの実施状況

採用広報解禁前の業界・企業研究セミナー（以下学内セミナー）の実施について尋ねたところ、「実施する」が約8割と大半を占めた（81.0%）。学内セミナーを実施する大学に、実施形式を尋ねたところ、「会場型／対面」「オンライン形式（ライブ配信）」ともに約半数が選んだ（52.3%、54.8%）。前年は、オンラインでの実施が主流だったが、今年は会場型が大きく増加し、その分オンラインが減少した。

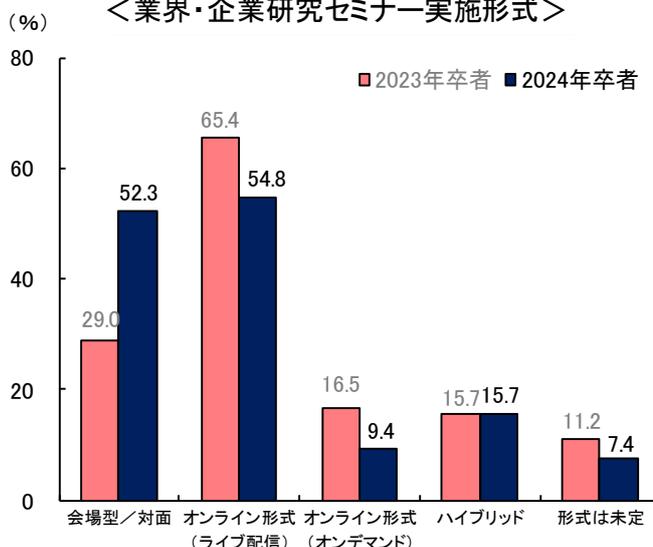
実施時期（予定を含む）をすべて選んでもらったところ、採用広報解禁直前である「3年次の2月」が最も多いが、前年調査より減少（61.4%→56.7%）。代わりに「6月」「7月」のポイントが増加するなど、全体的に早い時期の実施が増えていることがわかる。

＜3月より前の業界研究・企業研究セミナー実施状況＞



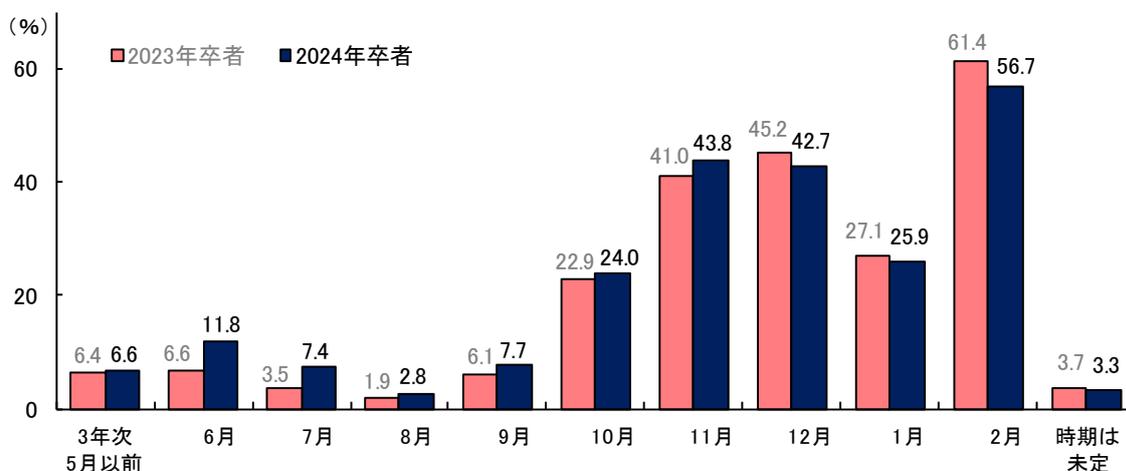
※オンラインを含む
※()内は前年同期調査の数値

＜業界・企業研究セミナー実施形式＞



※セミナー実施予定の大学が回答

＜業界研究・企業研究セミナーの実施時期＞

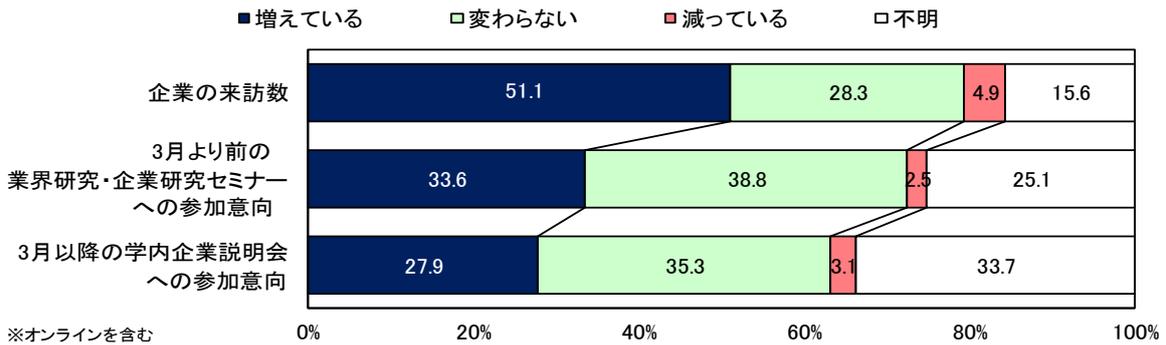


※オンラインを含む
※セミナー実施予定の大学が回答

【6】企業からのアプローチ

企業の来訪数や、学内セミナー、学内企業説明会への参加意向の増減について尋ねた。いずれも前年より「増えている」が「減っている」を大幅に上回る。特に、企業の来訪数は「増えている」が過半数に上る（51.1%）。大学を通じて学生にアプローチしたい企業が増加していることが読み取れる。ただし、学内セミナーや学内企業説明会については、「不明」との回答が一定数あり、学生の参加が見込めない等の理由で、参加を決めかねている企業もあると見られる。

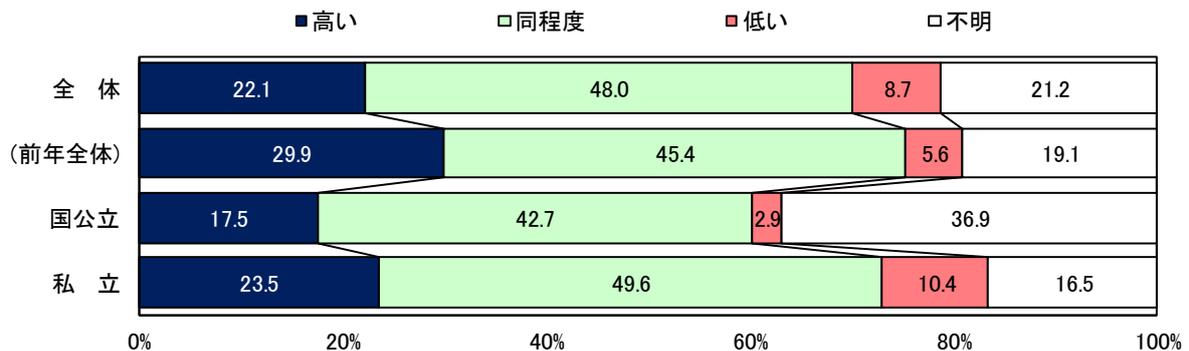
＜2024年卒者に対する企業のアプローチ(前年度と比べて)＞



【7】学生の就職意識に対する所感

2024年卒者の就職に対する意識について所感を尋ねると、前年の学生より「高い」（22.1%）が「低い」（8.7%）を上回る。インターンシップへの参加意向などから学生の意識の高さを感じとっている大学担当者が多いようだ。一方、2023年卒者の内定状況に改善傾向が見られることで危機感が薄まったり、就職意識が低下したりすることを懸念する声も見られた。

＜2024年卒者の就職に対する意識(前年度と比べて)＞



■2024年卒者の就職に対する意識について

- インターンシップ参加の必要性を十分に理解し、参加する学生が増えている様子が感じ取れる。 <公立大学>
- インターンシップや就職市場等について、早々に個別相談がある。 <私立大学>
- 先輩の就職が良いと、必ず次の学年は緩む。 <私立大学>

■採用活動をする企業への意見・要望

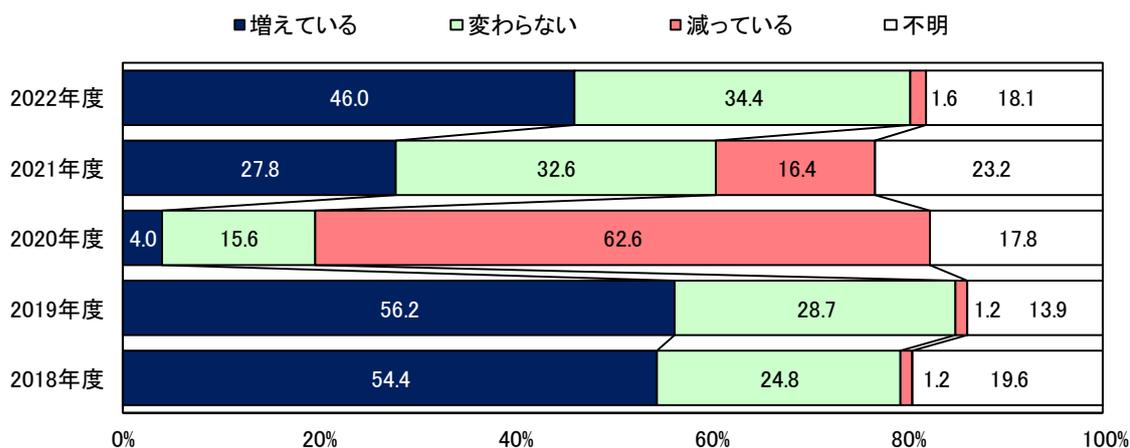
- 本学が設置している学科の専門分野を確認して、求人票を出していただきたいと感じています。 <私立大学>
- 紙の求人票を閲覧する学生はごくわずかであるため、キャリアス UC への登録を強く希望する。 <国立大学>
- コロナ禍に限らず、アポ無しでの来訪はご遠慮いただきたいです。 <私立大学>

3. インターンシップ等（※）のプログラム

[1] インターンシップ等の求人状況

今年度（2022年4月～2023年3月）のインターンシップ等の求人について尋ねたところ、「増えている」と回答した大学が4割強に上り（46.0%）、「減っている」（1.6%）という大学を大幅に上回った。経年で見ると、前々年度にコロナ禍の影響で実施企業が急減。求人も減少した大学が多かったものの、前年度は増加に転じ、今年度はさらに大きく増加した。

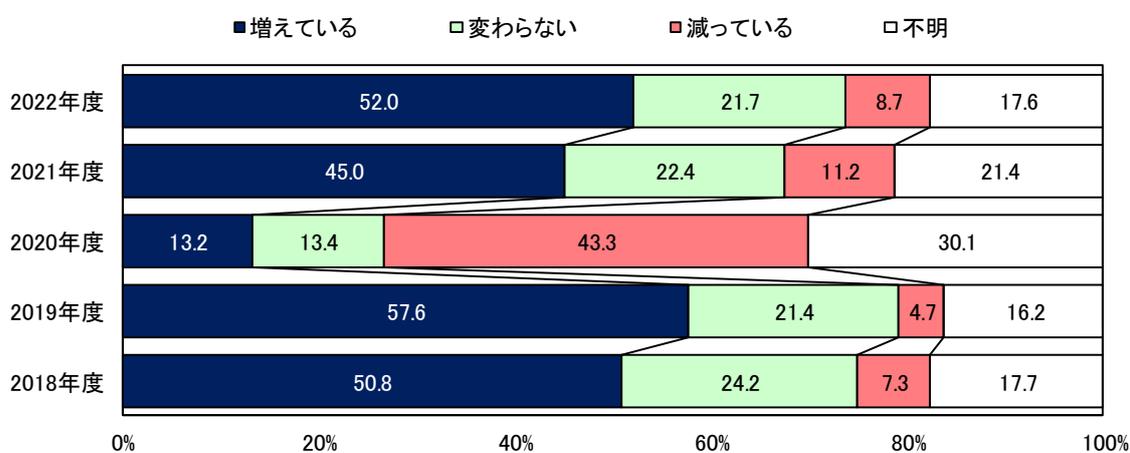
＜企業からのインターンシップ等求人状況（前年度と比べて）＞



[2] 学生の参加状況

一方、学生の参加状況はどうだろう。前年度よりも参加が「増えている」という大学が半数を超え（52.0%）、「減っている」（8.7%）を大きく上回った。インターンシップ等のプログラムを実施する企業が増加したことや、前期ガイダンスへの参加を通して学生が参加意欲を高めたことなどが影響していると考えられる。

＜学生のインターンシップ等参加状況（前年度と比べて）＞



※ 「インターンシップ（就業体験を伴う複数日程のプログラム）」に限定せず、1日以内のプログラム等も含めて尋ねた

【3】 インターンシップ等に対する見解

インターンシップ等のプログラムへの参加に対して、大学側がどのように捉えているかを尋ねた。就業体験を伴う複数日程のインターンシップに関しては、「積極的に参加したほうがいい」が8割を超えている（80.8%）。単日開催の1Day 仕事研究プログラムや、就業体験を伴わない業界研究プログラムに関しても、「積極的に参加したほうがいい」が過半数を占め（60.0%、54.7%）、参加を推す声は少なくない。業界研究・企業研究や職業観の涵養など目的に応じて、様々な形式のプログラムに積極的に参加してもらいたいという考えが多く見られた。

<学生のインターンシップ等のプログラムへの参加についての考え>

■積極的に参加したほうがいい □ある程度参加したほうがいい ■参加する必要はない



※オンラインを含む

■インターンシップ等のプログラム参加についての意見

- 仕事に関する視野を広げるという観点から、どのような形態であるかを問わず、インターンシップ等のプログラムへの参加は望ましいものと考える。 <国立大学>
- 仕事・会社について理解を深めること以外にも、大学外場で様々な方と交流し刺激を受けることが大きな経験になると感じている。 <私立大学>
- 本来の意味のインターンシップが望ましいが、本選考の優遇措置等もあるため、企業と早期に接点をもつことを推奨している。 <私立大学>
- 学業に差し支えない範囲で参加するのが望ましい。 <国立大学>
- 「参加を目的としないこと」を学生に理解してもらうことに非常に難しさを感じている。 <私立大学>

■2025年卒者以降、新定義で実施されるインターンシップへの期待や懸念

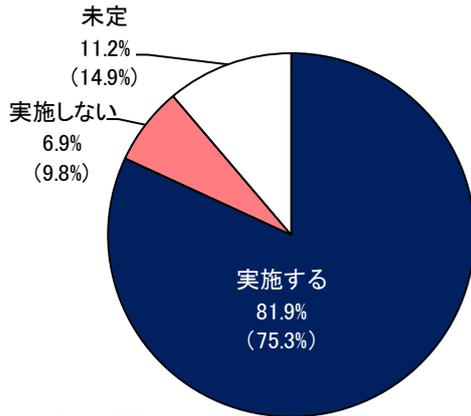
- 人材確保の視点だけでなく、学生のキャリア形成に資する取り組みとなることを期待する。 <私立大学>
- 相互理解の場としてより活用されることで、ミスマッチが少なくなれば良いと思っている。 <私立大学>
- 分類が複雑になったが、企業のほとんどは理解していないと思うので、問い合わせ対応が増えることが懸念される。 <国立大学>
- 過去の要請を見ても、守る企業・守らない企業が様々で学生が混乱するのではと思っています。 <国立大学>
- 大手企業が優位となり、中小企業は対応が困難となる可能性も感じている。一部の情報に偏らないよう指導する必要を感じている。 <私立大学>
- 大学として、学生には3年次の夏までに応募準備をさせなければならず、早期化が加速することを懸念している。 <私立大学>
- 企業の困り込みおよび早期採用選考の増加が気になるようです。 <私立大学>

4. 低学年向けキャリア支援

[1] 実施状況

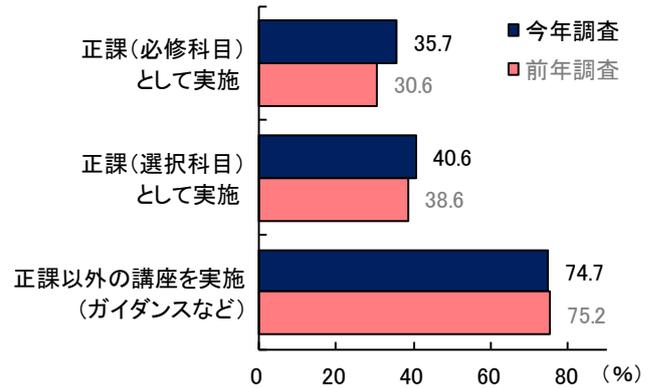
低学年（2025年卒以降）向けに今年度のキャリア支援を「実施する」大学は約8割（81.9%）。実施形式は、ガイダンスなどの「正課以外の講座を実施」が74.7%と圧倒的に多いが、正課として実施する大学も一定数見られる（必修科目35.7%、選択科目40.6%）。前年調査よりポイントが増加しており、低学年の支援に力を入れる大学が増えている様子が見てとれる。

＜低学年へのキャリア支援実施状況＞



※()内は前年同期調査の数値

＜低学年へのキャリア支援実施形式＞

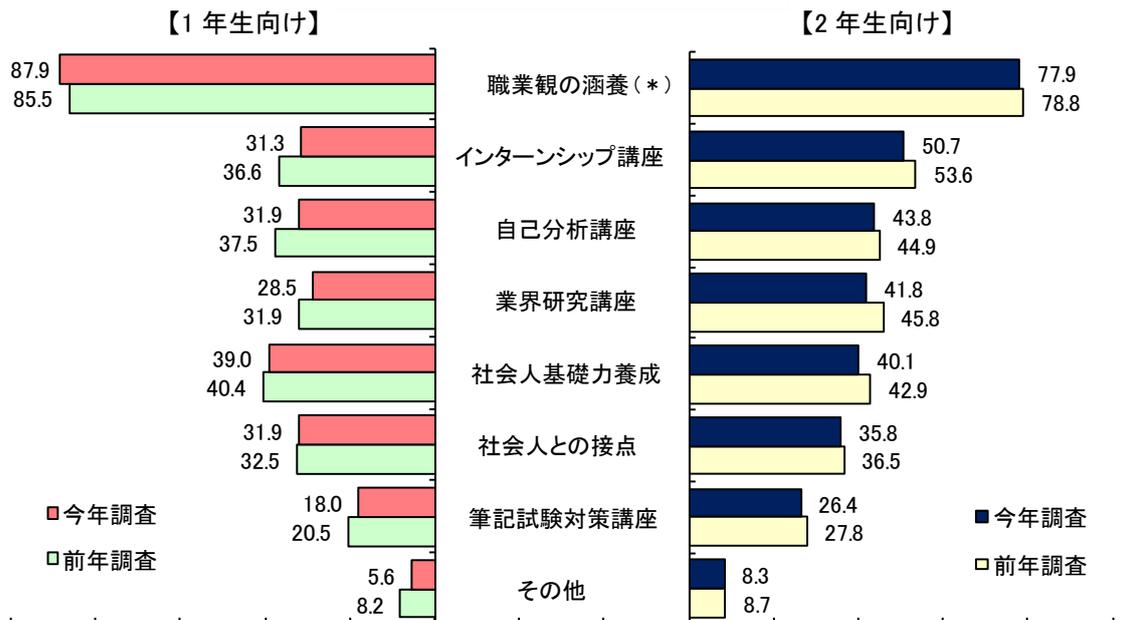


※低学年向けのキャリア支援実施大学が回答

[2] 実施内容

実施内容を学年別に尋ねた。「職業観の涵養」が、1・2年生とも圧倒的に多い。特に1年生向けには9割近い大学で行われている。2年生になると「インターンシップ講座」「業界研究講座」など、就職活動を見据えた、より実践的なプログラムも多く実施されている。

＜学生に対して実施している支援＞



* キャリア入門・キャリアデザイン等

※低学年向けのキャリア支援実施大学が回答

(%)